



劇団1980 ICHIKYU-HACHIMARU

原作／永 六輔  
脚本・演出／藤田 傳

# 「大往生」

●照明／中山 功 ●音響／宮崎誠二 ●衣裳／佐々波雅子  
●音楽／伊藤真介 ●舞台写真／宮内 勝 ●舞台監督／しゅうへい  
●協力／クリエートプロモーション／小市事務所／日本映画学校  
●企画・製作／劇団1980

96年7月6日(土)

〈2回公演〉 開演15:00(開場14:30)  
開演19:00(開場18:30)

黒部市国際文化センター コラーレ(大ホール)

入場料 S席…3,800円 当日4,300円(全席指定)  
A席…2,800円 当日3,300円(全席指定)

問い合わせ／財団法人黒部市国際文化センター TEL.0765(57)1201

主催 財団法人黒部市国際文化センター

共催 YKK労働組合

協賛 富山テレビ放送  
富山エフエム放送

後援 黒部市  
黒部市教育委員会  
北日本新聞社

●プレイガイド…コラーレ、メルシー、魚津サンブラザ、コスモ21、アスカ、インフォマート(市民プラザ、CIC)、マイ☆ステージ



# 大往生

とある老人ホームに暮らす男女合わせて12人の老人たち。日がな一日続く無駄話こそ、今生きていることの証し。つぶやき、独り言、熱弁、堂々巡り…。彼らの哀しくもおかしい一日に、ベストセラー『大往生』の名語録をちりばめて、生きることのほろ苦さ、死に逝くことの甘露さ、この珍味なる人生の味を、改めて楽しんでみる話題作。



昇る朝日は拝むけど、沈む夕日は拝まない

脚本工夫し飽きさせぬ展開

死という重い主題が日常的な目を通して語られるところは原作どおりだが、登場人物のふくらましかたによって、原作とはひと味違うおかしみを加えたのが、脚本の工夫である。物語がない代わりに、脚本は小さなエピソードを積み重ねて、客を飽きさせない。著者は続編の『二度目の大往生』のなかで、この本は「放送番組の台本の活字化」であり、「構成、つくり方がバラエティ・ショーである」と述べているが、舞台は活字化されたショーが、再び生身の人間によって目の前によみがえるのを見るようである。

(95・11・22/朝日新聞)

新鮮なおしゃべりの場面

大方の芝居の文法——順番通りの対話に逆らって、二組同時におしゃべりを始める。中の一人が話題を制すると、びたりと会話を収め、全員が次のテーマに集中する。この議論を通じて、個人的な十二人の老人たちの過去が垣間見える。しかし、あくまで日常の世界であることには変わりない。日々の営みの中から生まれられた彼らの名言は、観客の笑いを呼び覚まし、そして肺腑をえぐる。アンサンブルのいい絶妙の間。そして、茶碗を楽器としての合唱…。この劇団の良き特徴をすべて發揮していた。

(95・11・25/読売新聞)

子供叱るな来た道だもの 年寄り笑うな行く道だもの

原作は死について明るく語った点を評価されたのだと思います。

劇化した舞台は、死について馬鹿騒ぎしている点を原作者として評価します。

死とくれば葬式ですが、劇団1980は、その死をお祭りにしてしまいました。

僕の葬式も構成演出を藤田傳さんに頼もうかと思っています。

カキ



あの世はこの世、この世はあの世

死に方つてのは、生き方です

相生千恵子  
里村孝雄

- |         |            |
|---------|------------|
| 柴田義之    | 秋山美晴       |
| 藤川一步    | 小川美千代      |
| 加瀬慎一    | 澤 純子       |
| S・しゅうへい | 東城亜美枝      |
| 水口助弘    | 原 康子       |
| 山本隆世    | 仲井カヅ帆      |
| 八重樫慎一   | 竹田舞紀       |
| 荒深隆之    |            |
| 佐藤リョースケ | 宇野和男(声の出演) |
| 佐藤武史    |            |
| 澤村吉香    |            |
| 大久保甚六   |            |
| 翁長 諭    | 上野裕子       |
| 木之村達也   | 石井揮之       |
| 小林 清    | 上原弘之       |
| 島邊博昭    | 川辺静香       |
| 神 健夫    | 福田麻恵       |
| 松川 豊    | 古川志野       |
| 本田 豊    | 三浦はるか      |

## 劇団プロフィール

「1980」と書いて「イチキュウハチマル」。横浜放送映画専門学院(現:日本映画学校/理事長=映画監督 今村昌平)を母体として、文字通り1980年に結成。以後、劇団主宰者であり劇作・演出家の藤田傳の作品を柱に、年間2〜3本の新作を発表し続ける。結成以来一貫してこだわり続けているのが『喜劇ニッポン』。近代化の歴史から忘れ去られたような出来事や、現代社会の底辺に埋もれた事件を丹念に拾い集め、日本庶民史の暗部を、庶民の目の高さで元気に演じる集団喜劇が、ハチマル作品の特徴である。

### 【主な上演作品】

- ◆冬男村村會議事録 沖縄アジア演劇フェスティバル参加
- ◆謎解き 河内十人斬り 横浜アジア演劇祭/ルーマニア・シビウ演劇祭参加
- ◆秘事神楽 鬼八塚講 東京国際演劇祭参加
- ◆行路死亡人考 第29回紀伊國屋演劇賞(個人部門)受賞
- ◆大往生

劇団1980

〒156 東京都世田谷区松原3-40-5 泉ハイツ102  
TEL.03(3321)2835 FAX.03(3321)9092